

TOKYO PAPER

トーキョーペーパー^{for Culture}

フォー カルチャー

気づけば都心に目が向いていた。なにせ私たちの住む街東京は、言わずと知れた日本最大の都市であり、日本の中枢を担っている。そんな都心を、顔のパーツで例えるなら、目や鼻、口元がまず浮かぶ。人はどうしても目立った造形に、注目してしまうものだから。でも、見かたを変えると気づく。造形は、輪郭から生まれることを。顔には輪郭がある。街にも輪郭がある。静かな団地に、のどかな田園風景、そして都心から1,000km離れた場所に暮らす人々。そう、郊外や島々の営みがまた、この街の輪郭を作っている。力強く美しく。

Before we even realize, the heart of the city has drawn our eyes. It goes without saying that this city of Tokyo where we live is the largest metropolis in Japan, and the hub of the nation. If we compare it to a face, the parts that come to mind are the eyes, nose, and mouth, because inevitably, people focus on the shapes that stand out. But if we change our perspective, we begin to notice: those shapes arise from a larger outline. And just as a face has an outline, so does a city. A peaceful rice paddy in a quiet residential district. A community 1,000 kilometers away from the central Tokyo. What happens in the outskirts and on the islands far away creates the outline of this city. Beautifully, and powerfully.

第八号／008

東京の輪郭をなぞって

4,000m級の山々を、日々散策中

ホンマタカシ(写真家) × 小林聰美(女優) × 伊藤千枝(振付家)

研究テーマ⑧：

東北と一緒に考える

ART SUPPORT TOHOKU - TOKYO

東京×島京地図



4,000m級の山々を、日々散策中

東京郊外——。

それはすべてが過密な都心とは違う、

東京のもうひとつの顔。

ホンマタカシさん(写真家)、小林聰美さん(女優)、

伊藤千枝さん(振付家)を客員研究員に招き、

今号は武蔵野の面影を残す調布から三鷹へと探訪しました。

The outskirts of Tokyo present another face of the metropolis, where everything is different from its crowded center.

For this issue, we invited guest researchers

Takashi Homma (photographer), Satomi Kobayashi (actress), and Chie Ito (choreographer) to report from one such district, stretching from Chofu to Mitaka (the old Musashino area).

甲州街道沿いに佇むロイヤルホスト。郊外を映し出すこのファミレスで初対面を果たしたのは、ホンマさんと伊藤さん。一方の小林さんは、それぞれと仕事を通じて出会い、敬愛し合う間柄だった。そんなお三方がひとつのテーブルを囲み、快晴の調布飛行場に寄り道し、最後は国立天文台の敷地内にある、三鷹市星と森と絵本の家へ。大正時代の歴史ある建物と広い庭を傍らに置きながら、座談会が始まりました。

小林聰美(以下小林)：今日はみなさん東京生まれ、東京育ちのシティボーイとシティガールということで。

ホンマタカシ(以下ホンマ)：聰美さんはどちらの出身ですか？

小林：葛飾です。ホンマさんは？

ホンマ：僕はこのすぐ近くの西東京市です。生まれは文京区ですが、一歳の頃に引っ越してきました。

小林：ホンマさんが引っ越した当時は、西東京市という市名ではなかったですね。

ホンマ：その当時は保谷市と田無市という2つの市が存在していました。それが合併して、西東京市(2001年)になりました。

小林：今はもう田無市はないんですね。寂しい！「北新宿」とか、街をまとめてしまうところが、東京のちょっとつまらないところだなって。

伊藤千枝(以下伊藤)：私もそう思います。

ホンマ：例えば霞町も、西麻布ではなく、霞町のままで良かったのに。

小林：街の単位が小さいと、色々面倒だか

ら合併して名前を変えてしまうんですかね。

ホンマ：多分、効率化ですよね。でもそれによって、やっぱり人に説明するときは楽になりました。「どこの出身ですか？」と聞かれて、「田無、保谷周辺です」と言うよりも、西東京市の方が位置も含めて伝わりやすくて。伊藤さんはどちらの出身ですか？

伊藤：生まれも育ちも蒲田です。東京と言ってもだいぶ外れの街に、40歳の頃までずっと住んでいました。

小林：生糸の蒲田っ子。

伊藤：です(笑)。そんな蒲田は今、新しい電車を走らせようとしている計画があって、それが「蒲蒲線」と言うんですよ。

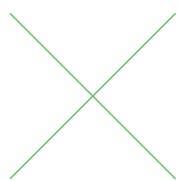
ホンマ：なんだかうどんみたいですね。

伊藤：名前、やっぱり気になりますよね？(笑)。そんな蒲蒲線開通に向けて、街がきれいに整備され始めているんですけど、その光景を見ながら、東京の人はつくづく新しいもの、きれいなものが好きだなって思いました。例え今の暮らしが不便じゃなくとも、外側から「こっちの方がいいよ」と推薦されると、それに流されていくようなところを最近よく感じます。

ホンマ：建物の話に限ると、東京の壊しては新しいものを作る性質みたいなものは、多分江戸時代の頃から受け継がれていますよね。江戸っ子は、簡素な木造でできた長屋暮らしだしたけど、それは火事などの災害が起きて家が倒壊してしまったときに、すぐに建て直しができるようにするために。だから何百年という歴史ある石造りの建物が並ぶヨーロッパとは、感覚が全然違う。



Takashi Homma



Satomi Kobayashi



Chie Ito



客員研究員の証
は毎号お馴染み
のロゼット!

This rosette shows
that they're our
guest researchers!



小林：東京は、新陳代謝の激しい街。
ホンマ：だからある意味で東京は当時から世界の最先端だったのかもしれないですね。江戸の街は火事が起きて当たり前だった。だから江戸っ子は基本的に根を張らない。食の定番だった蕎麦屋でも、蕎麦はさっと食べて爽快と店を後にするのが、江戸っ子の粋な食べ方でしたし。そうやって考えていくと、東京の人は、まるで小さいところを遊牧する遊牧民のような生き方なのかもしれませんよね。

小林：その遊牧民の素質からなのか、私はずっと東京に住みながら、どこか外側からこの街を見ているようなところがいつもありますね。

伊藤：わかります。なんというか、地方で

暮らす方や外国の方がイメージする「東京」の中には、私はいつもいない気がしています。
ホンマ：だからかえって地方から上京してきた人、例えば前回（※）の曾我部恵一さん（ミュージシャン）は、下北沢にしっかり根を張っている感じがあって。そういうことって、逆に東京の人の方が意外とできないのかもしれません。

ハードボイルド東京

伊藤：公演（珍しいキノコ舞踊団）のための稽古場所として、東京のスタジオを連続で借りられないときは、地方合宿をするんですね。そうすると、環境的には静かだ

しそうに稽古に没頭できる反面、10日間ぐらいずっとそこにいると、精神的には行き詰まってしまうことがよくあって。きっと普段、いろんな刺激に満ち溢れている東京で作品を作っているから、その環境に自然と心が慣れています。 **小林：**私の場合、その刺激がときどき強すぎて、例えば買い物ひとつ行くにしても、どこに行ったらいいかわからなくなることがあります。

ホンマ：つい最近、ニューヨークから知らない若い写真家が来日して、彼のブログ用にインタビューされたんですけど、そのとき「よくこんなストレスフルな街でセルフマネジメントできているな」とって、僕に言っています。そいつは東京のほかに、1ヶ月かけて九州を旅行していたみたいで「九州はいいよ。だけど東京はビッグニューヨークだ」とも言っていて。

伊藤：私も外国人の友達で、「東京は厳しいね」とて言う人が結構います。東京はいろんな刺激に慣れすぎて、飽和状態であるのかもしれない。それが逆に気持ちを内側に籠らせてしまう状況にもなっているのかなとは、思います。

小林：公演するとき、東京に比べて、地方や海外とでは雰囲気は違いますか？

伊藤：その土地ごとにやっぱり温度差があります。そんななかでも、東京は一番緊張します。お客様はみんな、日々いろんな刺激に慣れていますから、見る目も肥えているし、その分、作品の受け取り方も厳しいですよね。

小林：お芝居や音楽など、ジャンル問わず表現する人たちにとって、やっぱり東京は一番ハードルが高いですよね。

ホンマ：そもそも東京はイベントが多くますよね。

小林：確かに多すぎるとと思う。

ホンマ：僕自身、仕事柄観ないといけないものがあって、それを一つひとつ追いかけて観るのもう、精一杯。

伊藤：昔は1つの公演や展覧会に対して、本当にわくわくしながら待っていましたね。

「あと1週間だ！」とか言いながら。

ホンマ：それが今では「あれっ（会期が）終わってしまう」っていうことがよくある。だからそういう東京で生きていかなければいけないって、かなり大変です。ハードボイルドですよ、東京は。

小林：そういうなかでホンマさんは、いつもどんな気持ちで東京を撮っているんですか？

ホンマ：決してラブだけじゃないですね。でも嫌いだって言うのは簡単ですが、結局そこの部分も含めて、変わっていく東京を僕はただ撮るしかない、というか。それは欲求なのか宿命なのか自分でもわかんないですけど。

小林：ホンマさんの撮る東京は、なんというか、決して無邪気な東京は映っていないですね。

ホンマ：そうですね。だから東京に対する特別な思い入れを撮っている感覚はないんです。それに僕が考える東京みたいなものは、1枚の写真でどうこう言うではなく、撮り続けることで無意識に見えてくるものなのかなって思いますね。

小林：ホンマさんは海外に住もうとしたことはなかったですか？

ホンマ：過去に何度も住もうと思ったことがあったんですけど、結局行かずにここにいるのは、やっぱり東京を撮りたくなるからで。もしも僕が外国人だったとしても日本、それも東京は絶対に撮りに行こうなって思います。

小林：私も若いころは海外にすごく興味があったから、旅先も海外が多かったんですけど、最近は日本の不思議さにもかなり惹かれています。

ホンマ：だからもう海外に住むことは諦めている、今はこの街で抱えるストレスをどうやってやり過ごしながら暮らしていくかを考えています。東京にいると、ある意味4,000m級くらいの山を登っている気分になりますよ。

小林：それって命がけじゃないですか。



ホンマ：そうですよ（笑）。だから山靴履いて、なるべく人と接しないようにしながら、この大都会を山のように移動しています。

小林：（笑）。そういう技も、東京には確かに必要かもしれませんね。

正しい老人力

小林：東京の厳しいところばかり話題になりましたけど、東京の好きなところ、と言えば、あまり名も知られていない郊外の風景は好きですね。文化という視点で東京を捉えてみても、郊外の方がまだいろんな可能性がありそうですよね。楽しめる余白があって。ここ、武蔵野もまさにそう。日本の懐かしい風景が残っていて。

ホンマ：武蔵野はいいですね。武蔵野と

いう、響きが何かいいじゃないですか。

小林：きっと東京オリンピック（1964年）が開催された頃の風景も残っていそう。今後もそれはなくさずにぜひ残して欲しいなって思います。あと郊外ではないですけど、日本橋も好き。今あの界隈には新しいビルがたくさん建てられていますけど、昔ながらの風景もちゃんと残っていて。例えば日本橋人形町の甘酒横丁。ああいうのどかで、美味しいものがたくさん食べられる地域に住んでみたいな。

伊藤：蒲田もすごくのどかですよ。特に実家のある地域は、戦後に東北の方たちが出稼ぎに来ていた地域でもあるので、今も訛りがあったりして、独特の地域性があって面白いです。

小林：地元と言えば、葛飾もまたすごくの

どか。上野駅から京成線に乗ってときどき実家に帰るんですけど、電車のなかは、昭和の空気が漂っていて、窓からの眺めも昔とあまり変わらない。

伊藤：そうやって考えていくと確かに東京は厳しいけれど、好きな場所もたくさんあります。キノコは劇場に限らず、街のいろんな場所で踊ることがあるんですが、その場所が好きじゃないと絶対踊れないんです。そもそも場所自体が、私たちをウェルカムしてくれている。そしてそこで見てくれる人に対していくかに衝撃を与えられるか、見ている景色を変えられるのかを、いつも考えています。

小林：だから結局、どう街に対峙するかって、自分自身と場所次第ですよね。渋谷のスクランブル交差点や新宿の高層ビル街とか、そういう都心に入っていくと、やっぱり4,000m級の覚悟がいるけれど（笑）。いろんな断面、側面があっての東京だから、面白い。

ホンマ：場所によってはすごく息切れするから、気をつけてください。

伊藤：（笑）。山と言えば、東京にいても富

士山の見える場所に行くとうれしくなるんですけど、普段物事を見るときの視点においても、できるだけ遠くの方を見る努力っていうのはしないとなって思います。そういうないと、つまんない人生になっちゃう。

ホンマ：じゃあ老眼はいいですね。

伊藤：そうですね。必死に遠くを見るっていう（笑）。自分に合っています。

ホンマ：2050年には人類始まって以来の高齢化社会がやってくるらしいし。これからの時代は、老人力。by 赤瀬川さん。

小林：あ、それなら私、順調に老人力が養われています。今や落語や俳句が一番の趣味ですから。落語会とかに行くと、お客様の年齢が高くて落ち着きますよー。私なんて若者扱いです。

ホンマ：正しい老人力だ。

小林：いろんな意味で、ちょっと切羽詰まった最前端の東京には、老人力が必要。

伊藤：ということで。

ホンマ：これで十分、まとまったよね。

※本紙 vol.07に曾我部恵一さんが登場。その記事で下北沢のことにつれていました。詳細は公式ウェブサイト上のバックナンバーにて。

Everyday walk up a 4,000-meter-high mountain

Takashi Homma: Kobayashi-san, which part of Tokyo are you from?

Satomi Kobayashi: I'm from Katsushika. What about you?

Homma: I'm from Nishitokyo. I was born in the Bunkyo district, but I moved when I was one.

Kobayashi: Back when you moved there it wasn't called Nishitokyo, right?

Homma: Back then there were two cities, Hoya and Tanashi. They merged to become Nishitokyo (in 2001).

Kobayashi: This habit of merging districts is one of Tokyo's more unfortunate traits, I think.

Chie Ito: I think so too.

Kobayashi: A lot of things are inconvenient in small cities so they tend to merge together and change their names, don't they.

Homma: Maybe it has to do with optimization. But when that happens, it becomes easier to explain where a person is from. Nishitokyo is easier to explain, including its location. Ito-san, where are you from?

Ito: I was born and raised in Kamata. It's part of Tokyo but it's outskirt of the city. I lived there until I was 40. There's a plan to build a new rail line in Kamata called the Kamakama Line.

Homma: That sounds like some kind of udon noodle.

Ito: (laughs) The city is starting to get cleaned up in preparation for the opening of the Kamakama Line. As I watch that happen I've been thinking about how much Tokyoites love things that are new and clean. Even if their current life isn't inconvenient.

Kobayashi: Tokyo is a town where the new replaces the old at a furious pace.

Homma: In that sense, Tokyo was on the cutting edge of the world from way back then. Fire was a fact of life in Edo, and for that reason, the people living there basically never put down roots. It's just as if Tokyoites were a nomadic tribe wandering from place to place in their small territory.

Ito: Sometimes, to prepare for performances, I stay in the countryside with other performers. The environment is very quiet and I'm able to completely immerse myself in rehearsal, but after about ten days, I often find myself reaching a dead end psychologically. I think that because I normally create works in Tokyo, which is overflow-



ing with stimuli, I've naturally become accustomed to that environment.

Kobayashi: For me, that stimulation is sometimes too strong. For instance, there are times when I don't even know where I should go to buy a simple item at the store.

Homma: Very recently, a young photographer came from New York to Japan and interviewed me for his blog. He said to me, "It's amazing how well you manage to take care of yourself in this stressful city."

Ito: I also have a fair number of foreign friends who say Tokyo is a tough city.

Homma: In the first place, there are too

many events in Tokyo. I have to see certain things for work, and it's all I can do to just keep up with them all.

Kobayashi: Given that context, what feelings do you have when you photograph Tokyo?

Homma: It's definitely not always love. It's easy to say I don't like it, but in the end, I feel like my only option is to keep photographing Tokyo as it changes, that aspect

of it included.

Kobayashi: The Tokyo that you photograph certainly isn't an innocent one, is it.

Homma: Yes, that's true. I don't feel like I'm taking photographs that embody any special devotion to Tokyo. Tokyo as I think of it can't be captured with a single photograph. Instead, I come to see it without intention on my part, through the act of continuing to take pictures.

Kobayashi: Did you never think of living abroad?

Homma: I did think of moving abroad a number of times in the past, but ultimately the reason I stayed here is that I wanted to photograph Tokyo.

Kobayashi: When I was young I was also interested in other countries and I often went abroad on holiday. Recently though, I feel drawn to the oddness of Japan.

Homma: I've given up on living abroad and now I think about how I can let the stress of this city pass me by as I continue to live here. Being in Tokyo makes me

feel in a certain sense like I am climbing a 4,000-meter-high mountain.

Kobayashi: Your life is on the line then, isn't it!

Homma: I guess that's right (laughs). So I put on my mountain boots and move through this big city like it's a mountain, trying my best not to touch anyone else.

Kobayashi: (laughs.) That may be a skill that's necessary in Tokyo. We've been talking about the hard parts of Tokyo, but if I had to say what I like about Tokyo, it's the less known places on the fringes. Musashino, where we are now, is a perfect example of that. It still retains the nostalgic look of old Japan.

Ito: Kamata is also very peaceful. The area where my family home is located in particular was a place that a lot of people came to from the Tohoku area (the northeastern part of Japan) after the war to do seasonal work, so even today people speak in a dialect. It's an interesting place with a distinct local character.



ホンマタカシ／Takashi Homma

1962年東京生まれ。1999年『東京郊外 TOKYO SUBURBIA』(光琳社出版)で第24回木村伊兵衛写真賞受賞。2011年から2012年にかけて、自身初の美術館での個展「ニュードキュメンタリー」を日本国内三か所の美術館で開催。現在、東京造形大学大学院客員教授を務める。<http://betweenthebooks.com>

Born in 1962 in Tokyo, Takashi Homma was awarded the 24th Kimura Ihei Photography Award in 1999 for *TOKYO SUBURBIA* (Korinsha Publishers). From 2011 to 2012 his first solo museum exhibit, *New Documentary*, toured three museums in Japan. He is currently a visiting professor at Tokyo Zokei University Graduate School.

伊藤千枝／Chie Ito

1970年東京生まれ。1990年「珍しいキノコ舞踊団」を結成。以降、全作品の演出・振付・構成を担当し、国内外で作品を発表している。振付家としてフィリップ・ドゥクフレ『Iris』の演出アシスタントを務めたほか、CMや映画、テレビなどの印象的なダンスシーンを手掛けている。<http://www.strangekinoko.com>

Born in 1970 in Tokyo, Chie Ito founded Strange Kinoko Dance Company, in 1990. Since then she has directed, choreographed, and produced all the company's performances, which have been staged both at home and abroad. In her role as a choreographer she has served as assistant director for Philippe Decouflé's *Iris* and created distinctive dance scenes for a number of films, TV commercials and TV shows.

小林聰美／Satomi Kobayashi

1965年東京生まれ。映画、TVドラマのほか、エッセイ集の出版など多岐にわたり活動。主な出演作に『かもめ食堂』(06)、『めがね』(07)、『ガマの油』『プール』(09)、『マザーウォーター』(10)、『東京オアシス』(11)など。『紙の月』(14)では日本アカデミー賞を始め、数々の映画祭で助演女優賞を受賞。

Born in 1965 in Tokyo, Satomi Kobayashi's work has ranged from films and television dramas to essay collections. Her major film appearances include *Kamome Shokudo* ('06), *Megane* ('07), *Toad's Oil* ('09), *Pool* ('09), *Mother Water* ('10), and *Tokyo Oasis* ('11). She won the Japan Academy Prize for Outstanding Performance by an Actress in a Supporting Role, as well as numerous other awards, for her 2014 appearance in *Pale Moon*.

Kobayashi: Speaking of hometowns, Katsushika is also a very tranquil place. I take the Keisei Line from Ueno Station back to my parents' house sometimes, and the inside of the train has an air of the Showa period to it. The scenery outside the windows hasn't changed either.

Ito: When I think about it that way, Tokyo is a tough place, but there are lots of places I love, too.

Kobayashi: So ultimately, the way we confront the city is determined by ourselves and the place. When you go into the heart of the city to a place like the Shibuya diagonal crossing, you do need to prepare yourself for that 4,000-meter-high mountain (laughs).

Ito: Speaking of mountains, even in Tokyo, going to places where I can see Mt. Fuji makes me happy. When it comes to our perspective on ordinary things as well, I think we need to make an effort to look as far as possible into the distance. If we don't do that, life becomes dull.

Homma: In that sense, old-fashionedness must be good for us.

Ito: Yes, that's true. You look desperately into the distance (laughs).

Homma: I've heard that by 2050 we'll have the most aged society since the dawn of humanity. The coming era is all about "Rojinryoku (Elderly Power)" (the phrase coined by Genpei Akasegawa).

Kobayashi: My "Rojinryoku" is developing very nicely. My favorite current pastimes are rakugo (comic storytelling) and haiku poetry. When I go to rakugo performances, I feel so calm because the members of the audience are all elderly. They treat me like a young woman!

Homma: That's the right kind of "Rojinryoku."

Kobayashi: In many ways "Rojinryoku" is essential in this tense, cutting-edge city of Tokyo.

Ito: And with that concluding comment...

Homma: I think we've wrapped this up quite well.